

日

本文化を紹介するのには理想的な作品ではないのだから。東京郊外のパート仲間の主婦たちが、仲間一人が殺した夫の死体をバラバラにして捨てる犯罪小説。世界が日本文学とはこういうものだと思ってきた川端康成や谷崎潤一郎とは、まったく趣が違う。

だが、桐野夏生の『OUT』は先週、日本の小説で初の快挙を成し遂げた。2003年最高のミステリーとして、大衆文学ではアメリカで最も権威ある賞の一つ、エドガー賞（エドガー・アラン・ポーにちなむ）の最優秀作品候補4作品の一つに選ばれたのだ。

「これは大変なことだ」と、昨年『OUT』の英語版を出版した講談社インターナショナルの販売担当者シドニー・ウェバーは言う。「エドガー賞は並の賞ではない」

桐野だけでなく、日本の小説全体にとっても大事件だ。シックでカッコいい日本文化の代表といえ、アニメやコミック、北野武の映画だが、日本の小説家も10年ほど前から、世界に羽ばたく兆しを見せはじめていた。村上春樹や、よしもとばなな、ミステリー作家の宮部みゆきも絶賛された。

そして今、ハリウッドで映画化もされた鈴木光司のホラー小説『リング』の英語版や『OUT』の成功で、日本の出版社は国内の

ベストセラーは海外でも通用するという自信を深めている。

「日本の小説への関心が高いのは、クールなアジア文化の最先端にあるとみられているからだ」と、『OUT』を翻訳したコロラド大学ポールダー校のステイブン・スナイダー准教授は言う。「いま翻訳されているのも、日本のそういうイメージに合う作品だ」

もちろん、桐野がエドガー賞を受賞するとすれば、それは流行のためではなく、『OUT』という非凡な作品のおかげだろう。崖つぶちの現代日本女性の生きざまをえぐり出したこの小説を、アメリカの批評家は高く評価している。映画『ラスト・サムライ』や、

アメリカのベストセラー小説『メモワール・オブ・ゲイシャ』（邦題『さゆり』）に登場する着物姿の古風な日本美人とはかけ離れた世界だ。

アメリカ中心主義に挑戦

『OUT』は、都市の荒廃とゆがんだフェミニズム、そして独りよがりな正義をミックスした強烈な作品だ」と、ニューヨーク・タイムズ紙は評価した。「昨年の最も刺激的な犯罪小説」と評したの



日本文化 犯罪小説『OUT』が 権威あるエドガー賞候補に 日本の大衆小説は アニメや漫画に続くか

ては、かなりの売れ行きだ。ロコミの効果も大きかった。大学で文化人類学の教授が日本文化の講義の教材に使う例もあるとスナイダーは言う。読書クラブで『OUT』を取り上げたいという問い合わせも全米各地から届いている。

ニューヨークのミステリー専門書店ブラック・オーキッドの共同経営者ジョー・グヤメリによると、客はこの本に飛びつき、「次に来店したときには、とても気に入ったと言ってくれる」という。

昨年11月、ニューヨーク・タイムズが桐野のプロフィールを掲載すると、『OUT』はオンライン書店アマゾン・ドット・コムで売上げランキングで49位に入った。翻訳小説としては異例のヒットだ。日本の大衆小説の英語版市場の成長に賭ける出版社も出てきた。日本経済新聞社の書籍編集者だった酒井弘樹は、ニューヨークに小さな出版社バーティカルを立ち上げた。純文学ではなく、日本の最新の人気大衆小説をアメリカに紹介するための。

第1弾の『リング』はすでに5万部以上売れ、5月に出版予定の続編『スパイラル』（原題『らせん』）にも注文が殺到している。栗本薫のファンタジー小説『ゲイン・サーガ』の第1巻も、アメリカの批評家の間で高い評価を得ている。日本のSF作品としては前

代未聞だ。「日本文学といえは、けばけばしい東京か、白塗りの芸者の両極端しかないことが不満だった」と、バーティカルの宣伝担当アン・イシイは言う。「ある種のアメリカ文化中心主義だ。最高のミステリーやSFといえは、アメリカ人の作品だと思っ込んでいます」

肝心なのは今後の評価

その思い込みを崩すことはできるのだろうか。狭いオタクの世界を飛び出し、全米の大手書店で売られるようになった和製コミックはその強力な追い風だ。

村上春樹や村上龍への高い評価も、日本文学といえは三島由紀夫と源氏物語に終始した時代の終わりを告げている。「やっとな日本の小説がまともに議論される時代がきた」と、ウェバーは言う。

もっとも、喜ぶのはまだ早い。日本の小説は、アメリカ市場全体からみればまだごく一部。「英訳される小説もごくわずかだ」と、スナイダーは言う。

グヤメリは、エドガー賞ノミネートの意義について次のように指摘する。「受賞すれば、桐野はアメリカで大成功するかもしれない。だが肝心なのは、これから彼女の他の作品がどう評価されるかだ」

海外市場での日本の小説の未来も、それと同じだろう。

ティナ・ルイス